

ヒダサンショウウオ

佐々木 彰央



ヒダサンショウウオ幼生



ヒダサンショウウオ幼体



ヒダサンショウウオ成体



ヒダサンショウウオの卵囊(撮影者:佐藤拓也)

ヒダサンショウウオの基準産地は滋賀県大津市比叡山ですが、名前に飛騨とついているのは田子勝彌博士が岐阜県上宝村産の標本を未記載種として報告してしまったことに由来しています。その後、関東・中部・北陸・近畿・中国地方でも確認されたことから、実際には本州を代表する流水性サンショウウオといえます。静岡県内での本種の分布は天竜川、大井川、安倍川、興津川、富士川の源流部とその周辺の山地で確認され、伊豆には分布していません。標高は1000m前後で多く見られ、私がこれまでに確認した中で最も標高の高い生息地は大井川水系の1900mで、最も標高の低い生息地は興津川水系の332mでした。

本種を含むサンショウウオ科は成長過程で外見が大きく変化し、段階分けすると卵(胚)・幼生・幼体・成体に区分されます。本種の幼生は全長約20~40mmで、体色は透き通った黄緑色もしくは白色の背面に茶色の連続した斑紋がみられます。溪流の流れの緩やかな淵でカワゲラ・カゲロウ・トビケラなどの幼虫を捕食して成長します。幼生には水中で呼吸するための外鰓(がいさい)と溪流で流されないための爪があります。幼生の期間は地域によって異なりますが1~2年ほどで、その後上陸します。

上陸すると爪と外鰓はなくなり、眼が突出した幼体となります。陸上へと生活の場が変わると溪流周辺の倒木や岩の下、ヒミズ類の坑道を利用しながらミミズ・ワラジムシ・クモなどを捕食して生活をします。幼体の体色は紫色の背面に黄色の斑紋が多く見られ、成体よりも斑紋がしばしば目立ちます。

性成熟した成体は全長が142~191mmとなります。繁殖期以外の生活の場は稜線から河川付近までと広範囲に分散して生活していますが、積雪前の11月になると産卵場となる溪流へと集まり、河川付近の岩や倒木下で身を隠します。翌春、雪溪の下などの転石に1対の卵囊を産みつけます。1つの卵囊には10~20個ほどの卵を宿し、卵径は約5mmです。卵囊の皮は強靱で青みがかった虹色を呈します。そして、3~5月中旬にかけて幼生がふ化して河川へと分散していきます。